

## 保健体育科の主張

### 1 教科で育みたい人間像

5 人々が長寿となった近年において、生き生きと活力ある生活を送ることは誰もが願うことだろう。生き生きと活力ある生活を送るためには「取り組んでみたい」「挑戦してみよう」という気持ちになれるような心の状態や、行動にうつすことができる体の状態であることが大切だろう。そのような心や体の状態を維持するためには、心と体を連動として捉え、自らの生活に運動や健康的な生活を取り入れていくことが必要だと考える。運動や健康的な生活とのかかわり方は、する・みる・支えるなど多様であるため、自分の生活を振り  
10 返りながら取り入れていくことが大切である。どのようなかかわり方においても、様々な視点から運動や健康的な生活について思考することが、継続的にかかわることにつながるだろう。一つの視点からだけではなく、様々な視点から思考することで、課題や解決策を見いだしたり、新たな発見をしたりすることができ、運動や健康的な生活に対して、爽快感や達成感、喜び、仲間との一体感などの心地よさを感じることができると考える。その心地よさは、心と体が連動しているという実感となり、運動や健康的な生活に継続的にか  
15 かわることを後押しするだろう。そして、自分自身で運動や健康的な生活に適した場所や環境を求め、運動や健康的な生活そのものにおもしろさや親しみを感じていくことにつながると考えている。

このようなことから、保健体育科が育みたい人間像を「生涯にわたって、自分(たち)なりの運動や健康的な生活にかかわり続けていく人」とした。(以後、生活は健康的な生活を示すこととする)子どもたちが、運動や生活そのものにおもしろさや親しみを感じ、心と体が連動している実感を得ながら、継続的に運動や  
20 生活にかかわり続けていくことを願っている。

### 2 教科ならではの文化

保健体育科ならではの文化とは、する・みる・支えるなどの多様なかかわり方から「思考し、体現しよう  
25 とする営み」だと考えている。保健体育の授業で、子どもたちは、それぞれのかかわり方から思考し、体現しようとしていく。かかわる中で気がついたことを共有することで、さらに思考したり、自分たちの思考したことを実証するために体現したりすることで、根拠を明確にしていくだろう。このような思考と体現の繰り返しだが、新たな課題や解決策を見いだすことにもつながっていくだろう。

また、このような多様なかかわり方は「もっとこうしてみたい」といった向上心が生まれることによって  
30 も変化していくと考える。場面や状況によって立場を変えながら自分(たち)なりの合理的な動きや生活について思考し、体現しようとし続けることが、生涯にわたって運動や健康的な生活にかかわり続けていくことにつながっていると考えている。

### 3 願う子どもの学び

35 保健体育科の願う子どもの学びとは、「運動や生活に対する新たな視点を得ること」であると捉えている。子どもたちは、する・みる・支えるなどの多様なかかわり方を通して新たな視点を得たり、考えの変化を実感したりしていると考え。そのような学びを実現するために、以下を授業づくりで大切にしていく。

・多様なかかわり方ができる**題材選びと題材構想**

40 子どもたちがやってみようと思える動きや生活のイメージをもち、体を動かしたり、生活改善を図ったりするなど多様なかかわり方をしていくことで、課題や解決策を思考することにつながるだろう。授業者は、子どもたちに適した題材を選び、題材構想をしていく必要があると考える。

・課題の**焦点化**

45 子どもたちは試行した動きや生活に対して、様々な疑問や気づきを発見するだろう。その疑問や気づきに対して、他者の動きを観察したり、他者からアドバイスをもらったりすることで課題を焦点化することができる。焦点化した課題に対して、思考し、体現することで、徐々に自分(たち)なりの合理的な解決策を考えていくことができるだろう。

・動きの言語化の場の設定と価値づけ

- 子どもたちが自分たちの動きや生活を分析し、伝えることで新たな視点を得ることができる。そこで、必要となるのが動きの言語化である。動きを言語化することで課題や改善点に気がつきやすくなる。しかし、競技中は無意識な領域で活動することが多いため、オノマトペのように言語化したものを暗号化し感覚的に伝えることも必要となる。また、動きや生活の言語化と暗号化は、子どもたちが取り組んでみたいと思える動きや生活のイメージの共有がしやすくなり、子ども同士の価値づけにもつながると考える。

子どもたちが互いに認め合い、爽快感や達成感、喜び、仲間との一体感などの心地よさを味わっていくことを願っている。